

## 平成28年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

グローバル人材育成に向けて、地理歴史科を再編成して「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置し、中高一貫教育課程に位置付けながら、その学習内容と方法、評価について研究開発を行う。

### 2 研究の概要

高等学校（本校では後期課程，以下省略）地理歴史科に「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置することで、生徒のグローバルな時空間認識がどう育成されるかを、以下の方法により検証する。

- ① 現行の中学校（本校では前期課程，以下省略）社会科地理・歴史的分野及び高等学校世界史・日本史・地理各科目について分析・検証し，発達課題を踏まえた地理・歴史学習の再構成を行う。
- ② 後期課程4年（高1）に、「地理基礎」「歴史基礎」を必修科目として設置し、「グローバルな時空間認識」にとって有効な単元構成や年間指導計画を作成・実施する。
- ③ 地理歴史科における様々なリテラシーの育成を図るとともに，協同的な学びによる調査・発表・討論学習などを実践し，批判的・創造的思考力の育成を図る。
- ④ 新設科目における持続可能な開発のための教育（以下，ESD）の視点を強化するとともに，地歴学習と中高公民領域，総合的な学習の時間などとの連携の在り方を検討する。
- ⑤ 「グローバルな時空間認識」がどう育成されたかについて評価・検証を行う。

### 3 研究の目的と仮説等

#### （1）研究仮説

##### （1）-1 「現状の分析」

##### ① 「グローバルな時空間認識」の前提

今日進行しているグローバル化は，20世紀までに主張されていた「国際化」とは異なった現代的性格を有している。グローバル化は，国家エリートや機能集団の「国際化」を意味するのではなく，すべての人々を巻き込んだ地球規模での新たな今日的諸課題を孕んでいる。

日本学術会議（日本の展望委員会・知の創造分科会『提言 21世紀の教養と教養教育』2010年）は「グローバル」化の現状及びそれに対応しうる「知」のあり方について，21世紀初頭における地球規模で生じている危機的諸課題及び世界各国がグローバルな経済競争のなかで直面している課題について述べた上で，次のように指摘している。

「世界各国と人類社会が共通に直面しているこうした現代のさまざまな問題と課題は，それらに対応しうる知識・知性・教養の向上を切実に求めている。（中略）しかるに，その基盤となるべき教養は低下していると言われ，その再構築が喫緊の課題だと指摘されている。」

本研究開発は，上記学術会議の認識を前提とし，基盤となるべき教養につながる高校地理歴史科の再構築に向けて，「地理基礎」「歴史基礎」（必修科目）を設置することで，生徒のグローバルな時空間認識にとって有効な科目のあり方を，研究・検証しようとするものである。

##### ② 「グローバル人材育成」の必要性

知識基盤社会やグローバル化が進展する中で，「グローバル人材育成」の必要性が各方面で論究されており，グローバル人材育成推進会議（『グローバル人材育成推進会議審議まとめ『グローバル人材育成選略』2012年）は「グローバル人材」の要素として，以下の3点を提示した上で，要素Ⅰに関し，今後は，二者間折衝・交渉レベル及び多数者間折衝・交渉レベルの人材が継続的に育成され，一定数の「人材層」として確保されることが国際社会における今後の我が国の経済・社会の発展にとって極めて重要となると指摘した。

（要素Ⅰ） 語学力，コミュニケーション能力

（要素Ⅱ） 主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感

（要素Ⅲ） 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

さらに，こうした人材育成の基盤となる資質として，「幅広い教養・深い専門性」「課題発見・解決能力」「チームワークとリーダーシップ（異質な集団をまとめる）」「公共性・倫理観」「メディアリテラシー」などが指摘され，「21世紀型の教養」の重要性が強調されている。

グローバルな時空間認識とは，「世界と自己との関係」「異文化と自国文化」「地球規模で生じている人類共通の諸課題」などについて，グローバル&ローカルな視点や過去と未来を見すえた長期的視点を踏まえた，広い視野から理解できることである。また，持続可能な社会の形成に向け，国際的な諸課題に関与できる力の基盤とも言

える。その育成は「21世紀型教養」の基盤形成にとって必要不可欠なものであり、地理歴史科で正面から取り上げるべき課題である。

また、時間認識と空間認識は偏りなく共に必要であり、そのバランスも大切である。しかし、日本学術会議が指摘するように、世界史未履修問題の背景にある「授業時間数の減少」「小中学校における日本史中心の歴史教育」や、なかなか克服できない「知識詰め込み型教育」、高等学校で地理・日本史を全く履修しない生徒の存在などに起因する高校生の地理・歴史離れは、深刻な状況を招いている。（日本学術会議 高校地理歴史教育に関する分科会提言「新しい高校地理・歴史教育の創造ーグローバル化に対応した時空間認識の育成ー」2011年）

### ③ 教科、他領域との関係

地理歴史科は、地球的規模での諸課題と密接に結びついているため、公民科との関係は極めて強い。また、新学習指導要領ではユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の掲げる、ESDの理念と実践が強調されている。

教育振興基本計画（閣議決定2013年）では、ESDについて、持続可能な社会の構築という見地からは、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成する「持続可能な開発のための教育（ESD）」の推進が求められており、これはOECDが主導し国際合意された「キー・コンピテンシー」の養成にもつながるものであるとされている。

さらに、国立教育政策研究所は、ESDについて、その構成概念を「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」と「人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」に大別している。また、激変する地球的規模での現代的課題について、主体的に関わる人間性の育成とともに、体系的かつ批判的・創造的な思考力の重要性を指摘するなど、学力論的な整理も行っている。本研究でも、ESDの概念を取り入れ、研究を推進する。

※研究代表者角屋重樹(2012)『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究最終報告書』国立教育政策研究所教育課程研究センター

#### (1) - 2 「研究の目的」

- ① 本研究では、高等学校地理歴史科のA・B科目を再構成し、高校1年に必修科目「地理基礎」及び「歴史基礎」を設置することによる、生徒の地理的、歴史的な「見方や考え方」及び「グローバルな時空間認識」形成における効果について検証する。
- ② 本校が中高一貫教育校である特色を活かし、発達課題を踏まえた上で、中学校社会科各分野及び高等学校地理歴史科B科目（選択履修科目）と「地理基礎」「歴史基礎」の位置付けを明確にするとともに、神戸大学をはじめとする大学の協力を得て、学問的研究成果・学際的な研究成果などにも立脚しつつ、単元構成や年間指導計画を作成・実践する。
- ③ 地図、地理情報システム（GIS）及び史的資料をはじめとする地理歴史科の技能の育成を図るとともに、本校の協同学習の伝統を活かしつつ、単元構成や年間指導計画を作成し、調査・発表・討論学習などを実践し、批判的・創造的思考力の育成を図る。
- ④ ESDの視点などに見られる地球的規模での諸課題について、「地理基礎」「歴史基礎」に盛り込むとともに、本校が「グローバルキャリア人の育成」を教育目標として教育課程を編成していることを活かし、中高の公民領域、他教科及び総合的な学習の時間などとの連携の在り方について検討する。
- ⑤ 「地理基礎」「歴史基礎」において、生徒の「グローバルな時空間認識」がどのように形成され、達成されたかについて、各種評価を行うとともに、評価方法の在り方について研究する。

#### (1) - 3 「研究仮説」

「地理基礎」「歴史基礎」を本校4年生（高1）の教育課程に位置付け、以下のとおり研究開発を行う。

##### ① 「地理基礎」について

「地理基礎」では、中学校までに学習した地誌的な知識や見方と併せて、地球社会が直面する課題の解決に寄与するために必要な基礎的な知識や地理的技能、「見方・考え方」に関わる系統地理的内容を取り入れた。そのため、生活・文化を軸にした地誌的学習と地球的課題を地理的に考察する主題的学習からなる「地理A」とは異なる。さらに、現代の世界的課題や身近な地域的課題に興味を持てるような主題学習のために、ロジカルアプローチ（系統地理的考察）とリージョナルアプローチ（地域の事例）を学習内容及び学習活動の両面で相互に関連付けて学習する「主題的相互展開学習」（2単位科目）とした。

学習内容として、大項目は「(1)地球社会が直面する課題」及び「(2)グローバル化が進む世界」で構成し、これらの大項目は共に三つの中項目から成り立っている。さらに、小項目に地理学習の中心的な概念である「位置と分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「移動」、「地域」を盛り込み、国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な、基礎的・基本的な知識が確実に学習できるよう構成した。

「地理基礎」では、中学校の「動態地誌的な学習」を踏まえつつ、上記「主題的相互展開学習」を実施することで、「地理的な見方・考え方」を培い、高等学校「地理歴史科」の目標達成に寄与する。また「系統地理的考察」「地誌的考察」の中に主題学習が配置される選択履修科目「地理B」学習の基盤科目としても位置付ける。

本校には「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、「これらの理論や手法を用いた教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決的学習や

地理的技能の強化に取り組む。

## ② 「歴史基礎」について

「歴史基礎」では、世界史と日本史について、両者の関連付けを超えた「融合」的学習を追求する。したがって、取り扱う日本史用語も現行の「世界史A」より増加する。

また、毎時の授業において、探究的な学習となるよう工夫を行うとともに、単元全体を概括する際に「主題学習」を設け、多様な位相による「主題的単元史学習」を行い、歴史的技能、「見方・考え方」の育成を図る。本校の教育課程全体においては、本科目を4年時（高1）に配することから、5年時以降履修する選択科目「世界史B」「日本史B」の基盤科目としても位置付ける。

学習内容の構成については、時系列的な構成をとるが、あくまでも独立した「単元」を骨格にすえた構成とし、「通史」「概観史」的スタイルはとらない。取り扱う時代に関しては、近代史・現代史学習の重要性を認識しつつ、自然と社会、世界の地域文化の特色などを考えた場合、主題学習のための素材提供として前近代学習は欠かせないものと考えた。したがって、ほぼ同時代の世界と日本の歴史を、近代史・現代史を重視しつつ時間軸にそって扱う、時系列優先型で単元史を構成する。

単元構成案の作成にあたっては、新学習指導要領で拡大した中学校段階の世界史学習との重複を避けながら、世界史に関する基本的知識・概念・技能などを習得・活用させ、歴史的な見方・考え方の育成を目指す。東アジア史の比重を高めるとともに、ローカルな視点も盛り込みつつ、中学校段階での日本史理解を世界史との関連性の中で再認識させることで、世界史と日本史の一体的理解を図る。また、2単位科目であることを踏まえ扱う内容は厳選する。

本校には「小集団学習」や「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、これらの理論や手法を用いた教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決的学習や地理的技能の強化に取り組む。

## ③ 「地理基礎」「歴史基礎」の教育課程上の位置付け

中学校社会科では「地理的分野」「歴史的分野」を先行必修修させ、3年次の段階で「公民的分野」を必修修させる。中学校段階での基礎的理解の上に4年次（高1）で、「地理基礎」「歴史基礎」を必修修させ、両科目を履修することで、高校段階における「地理歴史科」の目標を達成させる。

その上に5・6年次（高2・3）に選択履修科目「世界史B」「日本史B」「地理B」（各4単位）を置き、「地理歴史科」の発展的学習とする。また、さらに深く学ぼうとする6年次（高3）には、学校設定科目として「探究世界史」「探究日本史」「探究地理」（各2単位）を開講し、基礎科目などでは困難な体系的なテーマを取り上げた学習を実施する予定である。

「グローバルな時空間認識」に関する発達課題の検討を踏まえた上で、中学校段階では、生徒の地理・歴史への興味・関心を引き出し、基本的知識の習得・活用を図るとともに、豊かな「時空間感覚」を培う。「地理基礎」「歴史基礎」は、地歴に関する各種知識・概念や技能、批判的・創造的思考力を基盤に地理・歴史的な「見方や考え方」を育成し、時空間認識を中学校段階から高等学校段階に移行させる上で、重要な鍵となる科目と位置づけている。

現代社会のグローバルな諸課題を認識する上で、公民領域との関係性が極めて重要となる。本校は、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標とする教育課程を編成しており、「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」は、ESDの実践そのものであり、「グローバルな時空間認識」育成にとって重要なパートナーである。また、宿泊行事（奈良、沖縄、イギリス）などにおいても、世界遺産学習を一つの柱としてESDに取り組んでいる。「地理基礎」「歴史基礎」と本校が目指す「グローバルキャリア人の育成」のための教育課程全体との関連性についても、検討を進める。

### （1）－4 「期待される具体的成果」

本研究開発に取り組むことにより、次のような成果が期待できる。

- ① 「地理基礎」履修時（4年次（高1））に、地理学習への関心・意欲、理解が以前より深まるとともに、地理学習に関わる技能や批判的・創造的思考力が深まることで、「地理的な見方や考え方」及び「グローバルな時空間認識」の基盤が形成される。
- ② 「歴史基礎」履修時（4年次（高1））に、歴史学習への関心・意欲、理解が以前より深まるとともに、歴史学習に関わる技能や批判的・創造的思考力が深まることで、「歴史的な見方や考え方（歴史的思考力）」及び「グローバルな時空間認識」の基盤が形成される。
- ③ 上記①②により、5年次（高2）以降で履修する地理歴史科B科目への関心・理解が深まる。特に、地理と歴史の関連性の理解、世界（史）と日本（史）の統一的理解について成果が見込まれる。
- ④ グローバルキャリア人育成やESDの推進を目指す本校教育、なかでも「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」などに積極的な影響を与えるなど、教育課程全体の改善に資する。
- ⑤ グローバル人材育成に関し必要な「幅広い教養・深い専門性」や「異文化理解」などの基礎となる知識・技能の習得、思考力の形成及び人格的資質などに寄与することができる。
- ⑥ 「地理基礎」「歴史基礎」に取り組むことで、中学校社会及び高等学校地理歴史科B科目についての諸課題が明らかとなり、発達課題を踏まえた地理歴史（公民）学習の中高一貫カリキュラムの再構成につながる。

## (2) 教育課程の特例

- ◇ 必修修科目である「世界史A」及び選択必修修科目である「地理A」「日本史A」に代えて、「地理基礎」「歴史基礎」を必修修科目とする。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

#### ① 「地理基礎」について

「地理基礎」では、中学校までに学習した地誌的な知識や見方と併せて、地球社会が直面する課題の解決に寄与するために必要な基礎的な知識や地理的技能、「見方・考え方」の土台となる系統地理的考察を取り入れた。そのため、地球規模と地域規模の地理的事象や諸課題を扱う地誌的学習と地球的課題を地理的に考察する主題的方法による学習からなる「地理A」とは異なる。さらに、現代の地球的課題や身近な地域的課題に興味をもてるような主題学習のために、ロジカルアプローチ（系統地理的考察）とリージョナルアプローチ（地域の事例）を学習内容及び学習活動の両面で相互に関連付けて学習する「主題的相互展開学習」（2単位科目）とした。

学習内容として、大項目は「(1)地球社会が直面する課題」及び「(2)持続可能な世界の構築」で構成し、これらの大項目はともに三つの中項目から成り立っている。さらに、小項目に地理学習の中心的な概念である「位置と分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「移動」、「地域」を盛り込み、国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な、基礎的な知識が確実に学習できるよう構成した。具体的には「位置と分布」は地表面における位置や分布を、「場所」は自然環境的・社会環境的特徴を、「人間と自然環境との相互依存関係」は人間と自然環境との関わりを、「移動・空間的相互依存作用」は地表面における人間の相互作用を、「地域」は地域がどのように形成され、変化するかを示す。

「地理基礎」では、中学校の「動態地誌的な学習」を踏まえつつ、上記「主題的相互展開学習」を実施することで、「地理的な見方・考え方」を培い、高等学校「地理歴史科」の目標達成に寄与する。また「系統地理的学習」「地誌的学習」の中に主題学習が配置される選択履修科目「地理B」学習の基盤科目としても位置付ける。

本校には「小集団学習」や「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、これらの理論や手法を用いた教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決的学習や地理的技能の強化に取り組む。

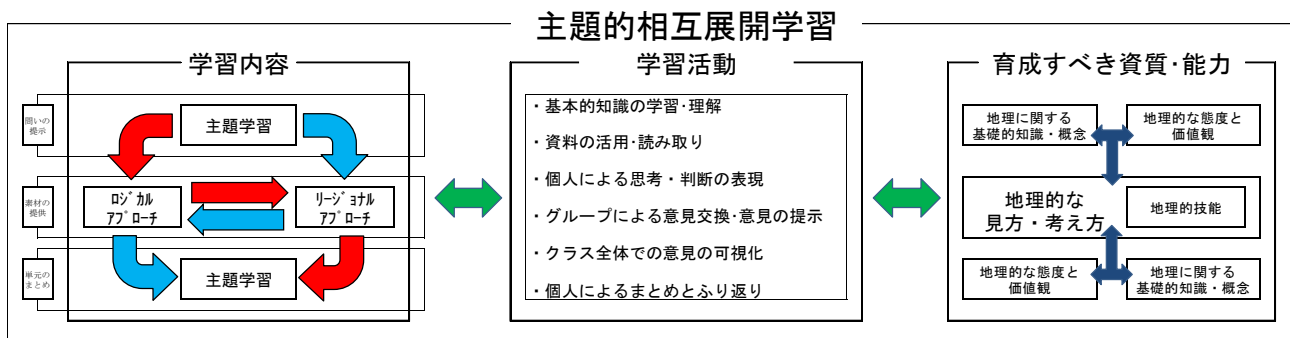


図1 「地理基礎」イメージ図

#### ② 「歴史基礎」について

「歴史基礎」では、世界史と日本史について、両者の関連付けを超えた「融合」的学習を追求する。したがって、取り扱う日本史用語も現行の「世界史A」より増加する。

また、毎時の授業において、探究的な学習となるよう工夫を行うとともに、単元全体を概括する際に「主題学習」を設け、多様な位相による「主題的単元史学習」を行い、歴史的技能、「見方・考え方」の育成を図る。本校の教育課程全体においては、本科目を4年時（高1）に配することから、5年時以降履修する選択科目「世界史B」「日本史B」の基盤科目としても位置付ける。

学習内容の構成については、時系列的な構成をとるが、あくまでも独立した「単元」を骨格にすえた構成とし、「通史」「概観史」的スタイルはとらない。取り扱う時代に関しては、近代史・現代史学習の重要性を認識しつつ、自然と社会、世界の地域文化の特色などを考えた場合、主題学習のための素材提供として前近代学習は欠かせないものと考えた。したがって、ほぼ同時代の世界と日本の歴史を、近代史・現代史を重視しつつ時間軸にそって扱う、時系列優先型で単元史を構成する。

単元構成案の作成にあたっては、新学習指導要領で拡大した中学校段階の世界史学習との重複を避けながら、世界史に関する基本的知識・概念・技能などを習得・活用させ、歴史的な見方・考え方の育成を目指す。東アジア史の比重を高めるとともに、ローカルな視点も盛り込みつつ、中学校段階での日本史理解を世界史との関連性の中で再認識させることで、世界史と日本史の一体的理解を図る。また、2単位科目であることを踏まえ扱う内容は厳選する。

本校には「小集団学習」や「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、これらの理論や手法を用いた教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決の学習や地理的技能の強化に取り組む。

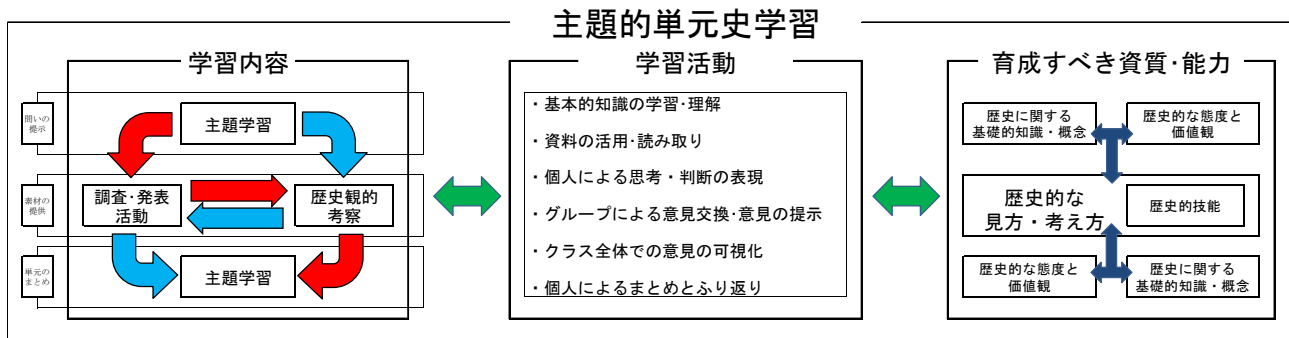


図2 「歴史基礎」 イメージ図

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>文部科学省、教育研究開発企画評価会議協力者、運営指導委員などの指導助言を受け、次の取組を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の「地理・歴史」に関する意識調査（関心・意欲・理解・技能など）の実施</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」との比較データとして使用するため、生徒の「世界史A」「地理A」に関する意識調査の実施</li> <li>新学習指導要領に準拠した「地理A」「世界史A」「日本史A」などの教科書分析</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画などの策定、教材開発</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の評価方法や評価指標の策定・運営指導委員会及び研修会（テーマ：「グローバルな時空間認識」）の開催</li> <li>各種フィールドワークの予備調査・先進校など視察による調査研究</li> </ul>
第2年次	<p>第1年次に策定した「地理基礎」「歴史基礎」の指導計画などに基づいて実践し、各種評価・検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の「地理基礎」「歴史基礎」に関する学習履歴の作成及び意識調査の実施</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画など及び評価方法・指標の評価・検証</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」と中学校社会科、高等学校地理歴史科及び教育課程全体との関係性の検討</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」を取り上げた公開研究会の実施・運営指導委員会及び講演会（テーマ：「グローバルな時空間認識」）の開催</li> <li>各種フィールドワークの実施・外部講師招聘及び先進校視察などによる調査研究</li> </ul>
第3年次	<p>第2年次に実践した「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し、各種評価・検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の「地理基礎」「歴史基礎」及び「地歴B科目」に関する意識調査などの実施</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画など及び評価方法・指標の評価・検証</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」と中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科、その他関連する教科などとの関係性についての検証</li> <li>中間報告会及び公開研究会（テーマ：「グローバル人材育成」）の開催</li> <li>運営指導委員会及び講演会（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催</li> <li>各種フィールドワークの実施・先進校など視察による調査研究</li> </ul>
第4年次	<p>第3年次の「地理基礎」「歴史基礎」などの成果と課題に基づいて改善・実践し、各種評価を行い、「地理基礎」「歴史基礎」の提言を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の「地理基礎」「歴史基礎」「地歴B科目」及びグローバルな時空間認識に関する全般的な意識調査などの実施と総括</li> <li>新科目の目標・内容・単元構成・指導計画など及び評価方法・指標の総括</li> <li>新科目と教育課程全体との関係性に基づく実践と検証・運営指導委員会及び公開授業（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催</li> <li>運営指導委員会及び講演（テーマ：「グローバル人材育成と時空間認識」）の開催・先進校など視察による調査研究</li> </ul>

## (3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>文部科学省や教育研究開発企画評価会議協力者、運営指導委員、研究協力者などから以下の項目に関する評価を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新学習指導要領に準拠した「地理A」「世界史A」「日本史A」などの教科書分析結果</li> <li>生徒の「地理・歴史」に関する意識調査（アンケートなど）の分析結果</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画など</li> </ul>
第2年次	<p>「地理基礎」「歴史基礎」を研究計画に基づいて実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒による学習履歴調査、アンケート及び定期考査などから、「地理基礎」「歴史基礎」の関心度・定着度評価などをテキストマイニング分析の手法を用いて実施する。</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の目標・内容・単元構成・指導計画、評価方法や評価指標について、実践結果に基づき、運営指導委員、研究協力者などからの評価を受ける。</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」について公開研究会・講演会などを実施し、他校教員などの参加者による評価を受ける。</li> </ul>
第3年次	<p>第2年次の「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒による学習履歴調査、アンケート及び定期考査などから生徒の「地理基礎」「歴史基礎」「地歴B科目」に関する関心度・定着度評価などをテキストマイニング分析の手法を用いて実施する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒によるアンケート調査や運営指導委員、研究協力者などから、「地理基礎」「歴史基礎」と関連性のある教科などとの関係性についての評価を受ける。</li> <li>中間報告会及び公開研究会などを開催し、他校教員・一般市民などの参加者からの外部評価を実施する。</li> </ul>
第4年次	<p>第3年次の「地理基礎」「歴史基礎」の成果と課題に基づいて改善・実践し、以下の各種評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒による学習履歴調査、アンケート及びび定期考査などから生徒の「地理基礎」「歴史基礎」「地歴B科目」に関する関心度・定着度評価などをテキストマイニング分析の手法を用いて実施する。</li> <li>「グローバル人材育成」をテーマに報告会及び公開研究会などを実施し、他校教員・一般市民などの参加者による外部評価を実施する。</li> <li>第一年次と第二年次以降の生徒の意識調査などにより、「世界史A」「地理A（実施前）」と「地理基礎」「歴史基礎」（実施後）の子どもの状況について比較・検証を行う。</li> <li>「地理基礎」「歴史基礎」の教育効果について、総合的な検証・評価を行う。</li> <li>運営指導委員、研究協力者などから、「グローバル人材育成」と「地理基礎」「歴史基礎」との関係性をはじめ、本研究開発全体についての評価を受ける。</li> </ul>

## 5 研究開発の成果

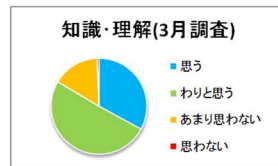
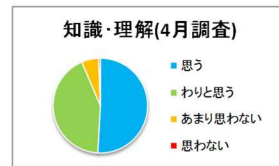
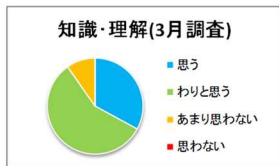
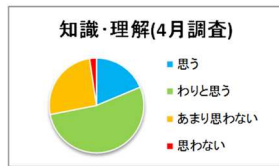
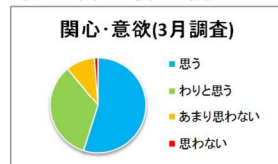
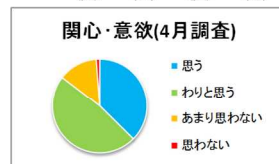
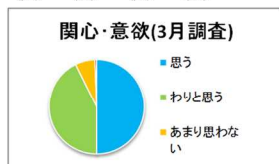
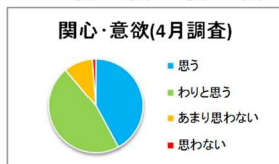
### (1) 実施による効果

#### (1) - 1 中学校の社会科と比較して

#### (1) 中学校の社会科と比較して

中学校の社会科の授業と比較するために、4月に中学校の社会科の授業に関する調査と3月に中学校の社会科と高等学校の地理基礎、歴史基礎の授業を比較した調査を行った。

	平成27年度4月調査（中学校について） 地理的分野への感想				3月調査（高校について） 地理基礎への感想				平成27年度4月調査（中学校について） 歴史的分野への感想				3月調査（高校について） 歴史基礎への感想			
	関心・意欲・態度		知識・理解		関心・意欲・態度		知識・理解		関心・意欲・態度		知識・理解		関心・意欲・態度		知識・理解	
4 思う	72	42.1	32	18.7	82	50.0	54	32.9	64	37.4	87	50.9	90	54.9	54	32.9
3 わりと思う	80	46.8	91	53.2	70	42.7	94	57.3	82	48.0	73	42.7	56	34.1	83	50.6
2 あまり思わない	17	9.9	44	25.7	11	6.7	16	9.8	23	13.5	10	5.8	16	9.8	26	15.9
1 思わない	2	1.2	4	2.3	1	0.6	0	0.0	2	1.2	1	0.6	2	1.2	1	0.6
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)

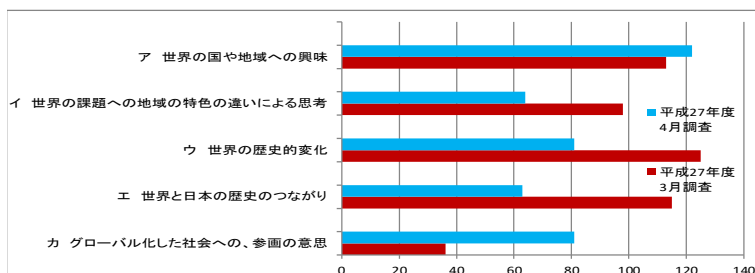


態度」「知識・理解」とともに大幅に向上した。科目全体のバランスを調整しつつ、単元毎の主題やねらいまで検討できた効果が現れている。「歴史基礎」については、「関心・意欲・態度」の項目については大幅に向上したが、「知識・理解」の項目については、「思う」がやや減少した。単元の構成が確立したことで、「歴史基礎」の楽しさや興味深さに気づいた生徒が増えたが、科目全体の検討が遅れたため、楽しさが科目の理解につながるまでには至らなかった。これらを踏まえ、バランスの取れた科目全体構成を確立した。

#### (2) 学習項目について

教育課程の内容について確認するために、学習項目についての調査を行った。4月の調査は身に付けたい学習項目であり、3月の調査は身に付いた学習項目である。(複数回答可)

	平成27年度4月調査		平成27年度3月調査	
ア 世界の国や地域への興味	122	71.3	113	68.9
イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考	64	37.4	98	59.8
ウ 世界の歴史的变化	81	47.4	125	76.2
エ 世界と日本の歴史のつながり	63	36.8	115	70.1
オ 世界の歴史学習から起こった日本の歴史への興味			48	29.3
カ グローバル化した社会への、参画の意思	81	47.4	36	22.0
キ 地理とともに歴史の授業を学ぶ事の有用性			98	59.8
	(人)	(%)	(人)	(%)



科目全体の各観点における調査では年度当初の期待する気持ちや前年度の結果より下回った項目もあったが、教育課程の内容について確認するための学習項目調査においては多くの項目で4月調査や前年度末の結果を上回った。特に、学習項目の「イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考」や「ウ 世界の歴史的变化」、「エ 世界と日本の歴史のつながり」は4月当初の期待より定着した実感が高い。また、「ア 世界の国や地域への興味」においても、4月調査より若干下がったとはいえ高い数値を示している。「イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考」や「エ 世界と日本の歴史のつながり」の項目は「グローバルな時空間認識」の根幹となる項目であり、最も意識して授業を行っている項目でもある。これらの結果から、各授業における知識レベルでの定着は実感されているものの、地理基礎や歴史基礎の科目全体としての効果の高まりを認識するまでには到っていないと判断できる。それは、「カ グローバル化した社会への、参画の意思」の数値が下回っていることから判断できる。一つ一つの授業のねらいは生徒に伝わり、それが実感として感じられていることは分かった。これらを科目全体として認識することができるよう、さらに、単元構成の精選や工夫など、科目全体の構想を具現化できるカリキュラムを確立した。

### (3) 指導方法等について

#### ① 思考・判断・表現、資料活用の技能について

指導方法について確認するために、4月に地理基礎、歴史基礎の授業への期待する気持ちと、3月に地理基礎、歴史基礎の授業を受けた後の感想を比較する調査を行った。

	平成27年度4月調査（期待する気持ち）				3月調査（実施後の感想）			
	思考・判断・表現		資料活用の技能		思考・判断・表現		資料活用の技能	
4 思う	55	32.2	28	16.4	45	27.4	47	28.7
3 わりとと思う	80	46.8	94	56.0	97	59.1	96	58.5
2 あまり思わない	32	18.7	40	23.4	22	13.4	20	12.2
1 思わない	4	2.3	9	5.6	0	0.0	1	0.6
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)

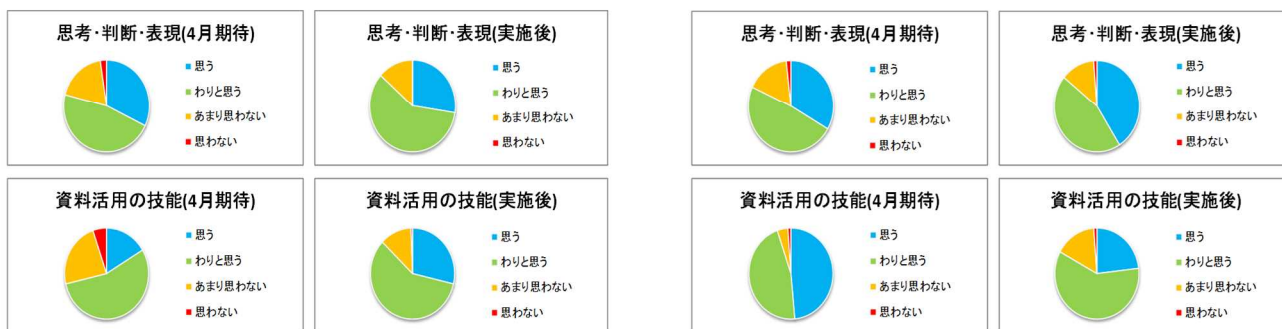


図1 授業開始前の期待する気持ちとの比較（左：地理基礎、右：歴史基礎）

地理基礎については「思考・判断・表現」の項目はやや下がったが、「資料活用の技能」の項目については向上した結果となった。生徒の興味関心を高める資料の選択は適切であったが、資料の活用において、資料からの読み取りそのものを教える授業が多かったのではないかと判断できる。生徒自らが、資料から思考判断できるよう、生徒主体的な授業を継続的に実施する必要がある。

一方、「歴史基礎」については「思考・判断・表現」の項目は向上したが、「資料活用の技能」の項目は下がった結果となった。生徒が思考する機会は多かったが、その根拠のもととなる資料の選択に工夫が必要である結果となった。思考判断する際に、思考判断に広がりをもたらす客観的な資料は、「地理基礎」「歴史基礎」の授業とも不可欠である。適切な内容でかつ適切な量の資料の活用を踏まえた授業の開発を行った。

#### ② 生徒参加型の授業について

生徒参加型の授業がその後の知識の習得とどのような関係があるか調査を行った。なお、調査学年は今年度の対象生徒ではなく、平成26年度に4年（高1）に在籍し、今年度本校6年（高3）に在籍している生徒である。また、研究開発指定初年度は試行年度として地理基礎は地理A、歴史基礎は世界史Aとして実施し、2年目から本格実施として、地理基礎、歴史基礎として実施した。

「地理」は研究開発学校指定以前から生徒参加型を意識した授業展開を行っており、ほとんどの生徒が生徒参加型であると認識している。一方、「歴史」は研究開発学校初年度は試行期間ということもあり、基本的には講義形式の授業が展開され、生徒参加型を意識した授業は部分的な実施だったが、2年目から生徒参加型を意識した授業展開とした。その生徒が6年（高3）になり大学受験に直面した際に、4年（高1）の授業を振り返ってみると、生徒参加型の授業であった地理の方が、現在の受験のための知識の習得に役立っていると回答した。グループ活動などの生徒参加型の授業の実施は、生徒の知識の習得が不十分になるのではないかと懸念もされるが、全く逆の結果となった。生徒が主体的に授業に参加することは、知識のより深い定着をもたらすといえる。

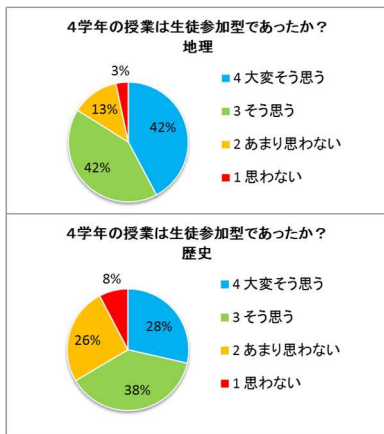


図2 地理と歴史の授業形態の比較

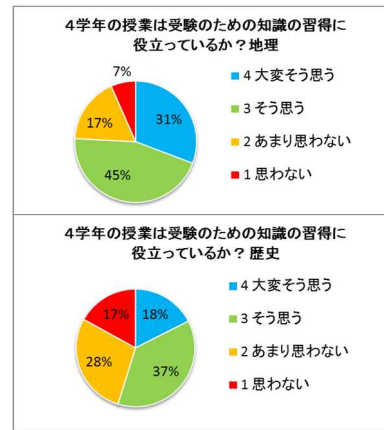


図3 地理と歴史の知識の習得についての比較

さらに、同じ歴史基礎で比較した。平成24年度は研究開発指定前であり、講義形式による世界史Aの授業を実施した。平成25年度は研究開発初年度であり試行期間として部分的に生徒参加型を意識した世界史Aの授業を実施し、平成26年度から全面的に生徒参加型を意識した「歴史基礎」の授業を実施した。

授業形態については全面的に生徒参加型を意識した授業形態を展開した平成26年度が生徒も最も高く生徒参加型と認識している。さらに、研究開発指定以降に4年(高1)で部分的であっても生徒参加型を意識した授業を受けた生徒の方が知識の習得に役立っていると認識している結果となった。

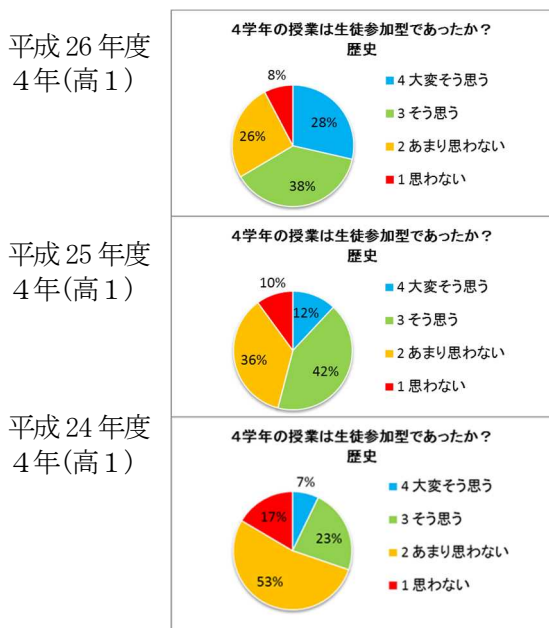


図4 地理と歴史の授業形態の比較

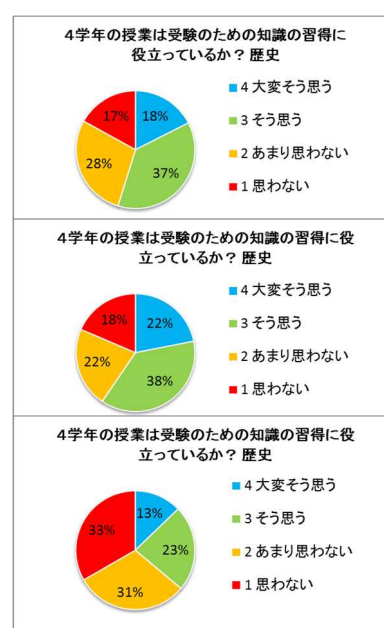


図5 地理と歴史の知識の習得についての比較

#### (4) 児童・生徒への効果

##### ① テキストマイニング分析から

###### ①-1 テキストマイニング分析とは

定型化されていない文章の集まりを自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出する手法やシステム。マイニング(mining)とは「発掘」という意味で、テキストの山から価値ある情報を掘り出す、といった意味が込められている。データマイニングの手法の一種である。(中略)テキストマイニングでは膨大に蓄積されたテキストデータを単語やフレーズに分解し、これらの関係を一定のルールに従って分析することにより、単語間の関係や時系列の変化などを抽出する。これにより、業務上の問題点を把握したり、製品の評価を調べたり、特に多い問い合わせやクレームを見出したり、これらが時系列にどう変遷しているかを調べたりすることができる。(IT用語辞典より)

###### ①-2 地理基礎

授業の感想を中学校地理的分野と地理基礎のそれぞれの項目で記述させた。アンケート実施は平成27年4月と10月、平成28年3月で対象となる生徒は同じ集団である。



中学地理	名詞			動詞			形容詞										
	地理基礎			地理基礎			地理基礎										
	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月								
世界	35	授業	52	地理	42	覚える	59	できる	76	できる	78	楽しい	33	面白い	36	面白い	29
授業	32	地域	44	授業	39	できる	43	思う	45	思う	47	面白い	26	楽しい	34	楽しい	28
日本	28	世界	39	世界	37	学ぶ	22	わかる	43	学ぶ	38	多い	22	様々	26	多い	17
気候	21	理解	30	地域	28	知る	20	知る	43	知る	32	好き	10	多い	19	良い	15
地理	19	興味	30	資料	26	思う	19	学ぶ	41	わかる	29	苦手	9	深い	16	深い	9
興味	17	地理	26	興味	24	わかる	18	考える	20	考える	26	大変	9	いろいろ	12	様々	8
国	15	自分	15	理解	16	考える	13	感じる	19	読み取る	13	良い	7	良い	7	詳しい	6
理解	15	知識	15	自分	14	言う	6	持つ	18	持つ	12	いろいろ	6	詳しい	6	難しい	6
文化	11	気候	14	集団	14	学べる	5	見る	17	感じる	10	詳しい	6	大切	6	いろいろ	5
暗記	10	内容	13	暗記	14	感じる	5	違う	12	受ける	10	深い	6	難しい	4	自然	4
自分	10	資料	12	ワークシート	10	見る	5	覚える	11	覚える	9	身近	4	苦手	4	苦手	3
学習	9	学習	10	気候	10	行く	5	持てる	11	持てる	7	少ない	4	大変	4	大変	3
集団	8	文化	10	意見	9	持つ	5	受ける	11	変わる	7	普通	3	好き	3	新鮮	3
地域	8	暗記	8	学習	9	行う	4	学べる	10	学べる	6	興味深い	3	必要	3	大切	3
地形	8	視点	8	内容	8	持てる	4	使う	6	見る	6	広い	3	普通	3	大変	3
特徴	8	地図	8	チャレンジテスト	8	受ける	4	つながる	5	聞く	6					必要	3
名前	8	つながり	7	日本	8			起こる	5	異なる	5					興味深い	3
歴史	8	特色	7	社会	7			生きる	5	行う	5						
		特徴	7	説明	7					つながる	5						
				つながり	7					習う	4						
										増える	4						

図6 地理的分野と地理基礎における授業の感想中の語句の登場数の比較(数値は回数)

「名詞」では「暗記」が、3月の調査では増加傾向にある。一見、暗記重視の授業が展開されたように映るが、生徒の記述内容を抽出すると、「暗記ではないところが面白かった」「暗記だけでなく、それをもとにした思考が必要とされる授業」「暗記だけでは通用しないということも知ることができた」「暗記がすべてというような固定観念をすべて払拭するような内容でとても新鮮だった」等、得られた知識をもとに、思考する場面が多く、それらが現れた結果である。「資料」が増加しているが、資料を基に、「利点や欠点などを自分で探することができるが増えた」「たくさんの資料を扱って教科書に載っていることだけではない深いところまで学ぶことができた」「資料の比較から分かったこと」「資料から情報を得ることで、同じ小集団のメンバーと共有ができる」等、資料を活用し、学習を深められたといった内容の記述となっている。特に、3月に頻出している理由としては、「地理基礎」のカリキュラム構成を科目全体のバランスを踏まえた単元構成としたため、前半の3単元より、後半の3単元のほうが、より資料活用の場面や生徒の思考判断の場面が多い構成となっている。その効果が顕著に表れた結果となった。

「動詞」では、今回も「できる」と答えた生徒が多い。10月の中間評価と比較すると減少しているが、学習前と比較すると依然として「わかる」も多い。「考える」が、中間評価以上に頻出し、学習前からは倍増しており、生徒が「地理基礎」での学習に手応えを感じていることが読み取れる。「つながり」もともに増加しており、さまざまな要因が「つながっている」ことに気づいたという感想が散見された。「読み取る」が急増している理由は、「資料」を「読み取る」ことの意義を実感したことの表れとなっている。

「形容詞」では、「苦手」という語を各生徒が徐々に減少し、「難しい」と書いた生徒も「難しいイメージがあったが、各地の地形、気候、地域から考えられる国の文化や特徴を知る事は、グローバル化した社会においてすごく重要なことであると思った。」等、肯定的な文脈の中での記述が見られた。

### ①-3 歴史基礎

授業の感想を中学校歴史的分野と歴史基礎のそれぞれの項目で記述させた。アンケート実施は平成27年4月と10月、3月で対象となる生徒は同じ集団である。

中学歴史	名詞			動詞			形容詞										
	歴史基礎			歴史基礎			歴史基礎										
	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月	平成27年4月	平成27年10月	平成28年3月								
歴史	39	歴史	73	歴史	90	できる	44	できる	66	できる	89	楽しい	32	面白い	33	面白い	26
授業	33	世界	63	授業	50	覚える	31	思う	54	思う	44	面白い	26	深い	23	多い	20
時代	33	授業	48	世界	35	知る	28	学ぶ	52	考える	38	多い	23	楽しい	19	楽しい	12
流れ	27	日本	43	興味	27	わかる	25	考える	48	わかる	27	好き	13	難しい	19	深い	12
理解	24	流れ	35	流れ	26	思う	17	わかる	40	知る	26	大変	13	多い	15	難しい	10
興味	22	理解	32	理解	23	学ぶ	11	知る	31	持つ	20	苦手	10	良い	12	良い	10
日本	16	興味	29	自分	23	持てる	11	持つ	23	学ぶ	19	難しい	10	様々	9	苦手	9
出来事	16	時代	24	時代	19	考える	10	つながる	17	感じる	15	良い	7	詳しい	8	詳しい	6
人物	13	出来事	23	問い	17	起こる	9	覚える	15	つながる	21	深い	7	興味深い	7	様々	6
先生	12	自分	19	小集団	17	悩む	7	受ける	14	覚える	14	詳しい	6	苦手	5	強い	5
背景	12	暗記	17	出来事	16	見る	6	感じる	13	受ける	13	得意	4	必要	5	大変	5
世界	11	つながり	14	日本	12	習う	6	起こる	10	変わる	8			好き	4	好き	4
内容	11	影響	13	内容	12	見る	7	言う	7		7			大切	4	大切	4
		考え	12	発表	10					深める	7						
		問い	10	視点	10												
		地域	9	意見	9												
		資料	8	つながり	9												
		変化	8	知識	9												
		単元	7	暗記	8												
		調査	7	調査	8												

図7 歴史的分野と歴史基礎における授業の感想中の語句の登場数の比較(数値は回数)

「名詞」で「暗記」が減少したが、「暗記」が数多く記載された10月の中間評価同様、記載内容は「歴史基礎の授業を受ける前までは歴史が嫌いで「暗記」と言う概念が強かったが、この授業を受けて歴史をつながりて捉えられるようになり興味を持てるようになった。」に見られるように、歴史の学習に対するとらえ方が大きく変化したものであった。「問い」が増加しているのは、「問い」を設定する授業の形式が、徐々に定着し始めている傾向を表している。「つながり」「つながる」はともに、中間評価同様、歴史基礎の学習前には全く見られなかった表現である。これらについては、「「問い」に対して授業や自分の調査から答えを出すのはとても難しかったが、歴史のつながりを感じた時はとても楽しかった。」という内容の記述が複数見られた。「問い」および、授業内容の工夫で難しいと感じながらも、調査に取り組む中で、面白さを感じる生徒も見られた。

「動詞」では「できる」が、中間評価よりも更に増加し、学習前と比較すると倍増している。「動詞」の「わかる」が中間評価にくらべて減少しているが、「わかる」「わからない」ともに、同様の「わかる」として計上されるしくみとなっており、中間評価との登場回数の違いは「わかる」の表現では中間評価と変化なく、「わからない」といった表記はほぼなくなったため減少した。

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

中学校社会科地理・歴史的分野及び高等学校世界史・日本史・地理各科目について分析・検証し、発達段階を踏まえた地理・歴史学習の再構成を行った。その結果、「地理基礎」を現代の地球的課題や身近な地域の課題に興味をもてるような主題学習のために、ロジカルアプローチ(系統地理的考察)とリージョナルアプローチ(地域の事例)を学習内容及び学習活動の両面で相互に関連付けて学習する「主題的相互展開学習」とした。また、「歴史基礎」は毎時の授業において、探究的な学習となるよう工夫を行うとともに、単元全体を概括する際に「主題学習」を設け、多様な位相による「主題的単元史学習」を行い、歴史的技能、「見方・考え方」の育成を図る科目とした。「地理基礎」「歴史基礎」ともにトータルプランを構成し、年間指導計画を作成するとともに実践し、ワークシート集を発行した。

グローバル人材を本校ではグローバルキャリア人と呼び、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等や主体的に学びに向かう態度などの資質・能力が備わった人材としている。「グローバルな時空間認識」を通して育成すべき資質・能力の中心に社会的な見方・考え方を据え、協同的な学びによる調査・発表・討論学習などを実践し、資質・能力の育成を図った。

その結果、生徒意識調査から授業への興味が高く、学習内容においても世界の課題への地域の特色の違いや世界と日本の歴史のつながりが定着している生徒が多い結果となった。一方、特に「歴史基礎」における資料活用の技能や「地理基礎」における思考力・判断力・表現力の育成において、やや課題が残されたといえる。これらは、中学校社会科との学習内容との関連性を高めることで、改善されると仮定できる。「歴史基礎」においては思考・判断のために提示する資料の中学校社会科との関連性を意識して適切な量と適切な質の資料を準備することが必要である。また、「地理基礎」でも中学校社会科での取り組みを活かした学習活動の更なる深まりが求められる。

グローバル人材として必要な思考力や判断力、表現力等の資質・能力を育成するために「地理基礎」「歴史基礎」ともグループ学習を中心とした生徒参加型授業を多くの学習活動で取り入れた。生徒意識調査から生徒参加型授業には概ね好意的な結果となった。さらに、生徒参加型の授業は知識の習得に役立つという実証結果も得られ、グループ活動などの生徒参加型の授業の実施は、生徒の知識の習得が不十分になるのではないかという懸念もされるが、全く逆の結果となった。生徒が主体的に授業に参加することは、知識のより深い定着をもたらすといえる。

このように、4年間の研究開発の実践では、生徒への意識調査やアンケート、運営指導委員会や研究発表会参加者からの意見などを総括すると「地理基礎」「歴史基礎」の両科目を履修し、主題学習を中心とした生徒参加型授業に取り組むことは、「グローバルな時空間認識」が高まるとともに、グローバル人材育成につながると立証できた。しかし、本校以外での実践においても同様の効果が得られるかどうかについては検証できなかった。4年間の研究開発期間では「地理基礎」「歴史基礎」の単元構成や年間指導計画の作成・実施が中心であり、トータルプランとしてまとめることができた。これらのトータルプランをもとに、本校以外での実践による本研究開発の汎用性の検証及び更なる改善の必要性が求められる。

神戸大学附属中等教育学校 教育課程表（平成28年度）

課程 時期区分 学年 教科・科目	標準 時数 単位	前期課程				後期課程			
		基礎期		充実期		発展期			
		1年	2年	3年	4年	5年		6年	
						文系	理系	文系	理系
国語	385	140	140	140					
国語総合	4				4				
現代文B	4					2	2	2	2
古典B	4					2	2	3	2
<b>探究国語</b>								⑨	2
社会	350	105	140	140					
世界史B	4				②	2	③	⑦	3
日本史B	4				②	+	③	⑦	+ ⑩
地理B	4				②	2	③	⑦	3 ⑩
<b>歴史基礎</b>									
<b>地理基礎</b>					2				
<b>探究世界史</b>								⑧	
<b>探究日本史</b>								⑧	
<b>探究地理</b>								⑧	
<b>国際理解</b>				( 35 )	1			⑦	1
<b>探究公民</b>									⑩
数学	385	140	140	175					
数学Ⅰ	3			( 35 )	2				
数学Ⅱ	4				1	4	4		
数学Ⅲ	5								6
数学A	2				2				
数学B	2					2	2		
<b>グローバル数学</b>									2
<b>探究数学</b>								⑨	2
理科	385	140	140	140					
物理基礎	2				2				
物理	4						④秋	2	⑪
化学基礎	2				2				
化学	4						2	2	4
生物基礎	2					2	春	2	
生物	4						④秋		⑪
地学基礎	2					2			
<b>探究物理</b>								⑩	2
<b>探究化学</b>								⑩	
<b>探究生物</b>								⑩	+
<b>探究地学</b>								⑩	2
保健体育	315	105	105	105					
体育	7-8				2	3	3	2	2
保健	2				1	1	1		
音楽	115	50	35	35					
美術	115	50	35	35					
音楽Ⅰ	2				①	2			
美術Ⅰ	2				①				
書道Ⅰ	2				①				
<b>探究音楽</b>								⑨	
<b>探究美術</b>								⑨	
外国語	420	140	140	140					
C英語Ⅰ	3				3				
C英語Ⅱ	4					4	4		
C英語Ⅲ	4							4	4
英語表現Ⅰ	2				2				
英語表現Ⅱ	4					2	2	2	2
技術・家庭	175	70	105	70					
家庭基礎	2			( 35 )					
情報の科学	2			( 35 )	1	2	2		
道徳	105	35	35	35					
総合的な学習の時間	190	105	70	70					
特別活動	105	40	35	35					
LHR	3				2	1	1	1	1
合計	3				1	1	1	1	1
合計		1120	1120	1120	32	32	32	32	32

\* 太字・斜体は学校設定科目を示す。

\* 網掛け・太字は、後期課程の内容の一部を前期課程に移行し履修する科目を示す。

\* 現代社会のうち1単位分を「国際理解」（学校設定科目）として履修する。

\* 「C英語」は「コミュニケーション英語」を示す。

## 学校等の概要

## 1 学校名, 校長名

学校名：コウベダイガクフソクチュウトウキョウイクガクコウ神戸大学附属中等教育学校  
 校長名：藤田裕嗣

## 2 所在地, 電話番号, FAX番号

所在地：兵庫県神戸市東灘区住吉山手5丁目11-1  
 電話番号：078-811-0232  
 FAX番号：078-821-1504

## 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数, 学級数

前期課程(中学校)			後期課程(高等学校普通科)			合計
1	2	3	4	5	6	
生徒 学級	生徒 学級	生徒 学級	生徒 学級	生徒 学級	生徒 学級	生徒 学級
120 3	141 3	188 5	180 5	164 5	135 5	928 26

## 4 教職員数

校長	副校長	事務長	主幹教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	時間講師	ALT	スクールカウンセラー	司書	事務職員	合計
1	2	1	2	57	2	1	14	2	2	1	5	90

① 教諭の内7名は期限付採用 ② ALT, スクールカウンセラー, 司書は非常勤採用